# 令和元年度　卒業証書授与式校長式辞

梅の花は百花の先駆と言いますが，梅の花も終わらぬうちに，桜の開花を迎えました。藤小の桜も赤みを帯び，ここで学んだ者にとってはひときわ思い出深い桜が，卒業生の門出を祝うかのようです。

さきほど小学校の課程を修了した、八十七名に卒業証書を手渡しました。一人一人が真っ直ぐにこちらを見る澄んだ瞳に、新たなる旅立ちへの決意を感じました。みなさんとは一年間と短いものでしたが、その思い出す場面は最高学年として学校を支える頼もしい姿ばかりでした。最初に驚かされたのは運動会です。赤白男女の団長がリードする応援や，迫力あるソイヤの演技。その後も全ての行事を六年生がリードしてくれました。市内陸上大会や柏市駅伝大会で活躍した陸上部。千葉県吹奏楽コンクール金賞で，東関東吹奏楽コンクールの大舞台で「明日へ吹く風」を演奏したブラスバンド部。その確かなサウンドが今も耳に残っています。

さて、みなさんへのはなむけの言葉です。今年は知っての通りオリンピック・パラリンピックイヤーです。パラリンピックは何かしらのハンデを持った人たちが競い合うスポーツの祭典です。「失った機能を数えるな、残った機能を最大限に活かせ」これはパラリンピックの父、イギリスの医師であるルートヴィヒ・グットマンの言葉です。失ってしまった機能を回復するために、リハビリを行うことはよく知られています。このリハビリをスポーツに変えることは、麻痺からの回復だけでなく「パラレル」すなわちもうひとつの別な世界へと自分を変えていくことを意味します。「失った機能を数えるな、残った機能を最大限に活かせ」パラリンピックで活躍するアスリートたちを見ていると、今ある最大限の機能と力を使って，自分の限界に挑戦している姿があります。車いすテニスの体験を思い出すまでもなく，それが無言の説得力を持って迫ってきます。

世の中に完全な人間などいません。多かれ少なかれ、苦手なものや，ハンデ。そしてコンプレックスを持っているものです。もちろん私にもあります。また、与えられたものも平等ではありません。それにくよくよ悩むよりも、それを自分に向いたものに変え、好きなものにしていくことができれば、どんなに素晴らしいことでしょう。色えんぴつのケースに一色しかない色えんぴつよりも、いろいろな色が並んでいる色えんぴつが美しいと感じるのは、みんな違った色でいて、それぞれの色に役割があるからです。そして色どうしが協力すれば、どんな絵でも自由に描けるといううことです。

これからむかえる中学校生活は思春期の時期にさしかかります。それに不安を感じている人もいると思います。しかし思春期はチャレンジ精神や学習能力が高まる時期でもあります。体力がつき，気力が充実し，リスクを恐れずに新しい世界を知りたいという気持ちが高まる時期です。内からわき上がるようなパワーを体感するでしょう。だから自分をコントロールできず，イラつくこともむしろ当たり前の時期なのです。ある説によると人の一番古い祖先である南の猿人，アウストラロピテクスがサルとはちがい、暖かいアフリカの地を離れ、まだ厳しい氷期の続く寒い世界各地に出て行ったのは、まさしく思春期のパワーがあったためだと言われています。これから思春期を迎えるみなさんはそのパワーでたくさんの事に挑戦してください。そして失敗を恐れず，あせらずたゆまずじっくりと自分を育てて下さい。

これからの時代は先行きの見えない不透明な時代と言われています。正に今がそうかもしれません。自分を発信し、相手と理解し合い、協同していくことがが次の時代に求められています。

さて保護者の皆様、本日はお子様のご卒業おめでとうございます。今回の騒動で六カ年の小学校生活を終えた子どもたちの晴れの姿に立ち会えなかったことは，誠に残念なことと思います。しかしこのような卒業式をむかえた子どもたちだからこそ、安全や人の命の大切，国際理解や国際協力についてより深く考えてくれると思います。卒業生は、この藤心小学校でたくさん活躍をしました。中学校でも同様に大きな力を発揮してくれるものと思います。それでも、これから思春期をむかえ、時には壁にぶつかり、悩み、心揺れることもあるでしょう。多感な時期を迎えるお子様の心を受け止め、優しさと厳しさを持って、温かく見守っていただきたいと思います。藤心小学校は　　の森と共にこれからもここで，あなたたちを見守り続けます。藤小をを巣立つ八十七名に幸多かれと祈念して、式辞といたします。

令和二年三月一七日

柏市立藤心小学校　校長　成島　敏恭